

# ジヨウは実在するのるか?

「ヤブキ ジョー」なんとカッコのいい名前でしょうか。京都市の電話帳には28人の「矢吹」さんが載っていますが「ジョー」さんは、さすがにいません。リキイシ トオルに至っては、同姓の方すらいません。ちなみに「ダテ ナオト」さんは、字こそちがいますが、一人おられます。プロレスラーなのか、真赤なスポーツカーに乗っておられるのかは定かではありません。鶴太郎がプロライセンズを取り、女性ダイエツトのためボクシングジムに通い、タイソンがえらい女につかまわり、元ボクサー安部譲二の本が売れ、そして「あしたのジョー」(KBS京都火ノ木 17時55分〜18時25分)が再放送されています。寺山修司作詞のテーマ曲が流れ、ムンクの「叫び」のよくなタッチで次々に野郎がのされていく、あれです。

日本のボクサーはみんな大変です。たいがいの方は、実在のボクサーに、ジョーの姿を写して見せようののですから。最もジョーに近づいたのは大場政夫でしょう。1ラウンドにダウンを喫し、足首をねんざしながらKO勝ちしたにとどまらず、コルベットで、高速の側壁にまで突っこんでくれました。今後の、ちがった意味でのジョー像を暗示してくれたのは浜田剛士です。パンチが強すぎる由、自らの拳を骨折しながら、お父さんが沖縄クロレラの社長さんだったりしました。

タイソンも少年院あたりですが、今売り出し中の大和武士というボクサーも、特少のお世話になった経歴があります。しかし、こうまで日本が金持ちになつてしまつた今、ジョーに近づくと「ハングリ」や「少年院」は、売り物にならないでしょう。

新目プロレスがタイガーマスクをデビューさせようとした時、原作者の梶原一騎から、注文が一つだけあつたそうです。

「タイガーマスクはコーナーポストに、すつくと立てねばならない。」

なかなか、カッコイイことを言うおっさんです。だてに池上季実子と浮き名を流していません。

出生は、極貧か、超上流家庭。とんでもない不細工か、モデル並みの男。ジョーに望まれるのは、そんな、絶対値の大きさのような気がします。中流家庭の出だけは許されません。そして、社会への反抗とか、一獲千金とかではなく、聖心出のアダルトビデオ嬢のような「獣の血」を見せてくれること。生命の保障もないボクシングに、これほどの演出を要求するのは、やはり酷なんでしょうね。

CLUB FAME COLUMN 1988

## HAPHAZARD REMARKS

FROM KYOTO JAPAN

### PROFILE

KAMEKICHI·KOUNOIKE 鴻池亀吉 [就職評論家・1962年生まれ]

“真のテレビ鑑賞家になるには、イッセー尾形のサラリーマンになることが必要条件である”との信念のもと就職活動に身血を注ぐ。次回より“現在放映中”を中心に鋭い番組批評が行われる。彼はいわゆる“マチ”で「カメ」と愛称されている。いい男である。

エレクト堀埜のエレクトリックランド

## 最先端の店について。

VOL 4

### PROFILE

ELECTO·HORINO エレクト・堀埜

[プランナー・1960年生まれ]

“業界の良心”と言われるプランニング・プロダクション、佛ビッグアップル・プロデュース所属のプランナー&ライター。古代ギリシャ哲学、とりわけアリストテレスに影響を受けた独自のバランス感覚で、あらゆる仕事をソツなくこなすことでは定評がある。現在はFM大阪の番組構成4本のほか、雑誌S A V V Y、オートファッション、ホットドックプレスなどレギュラー11本をかかえて、イテマエ的に多忙な毎日を過ごしている。

42

前回「なんとなく音楽のコラムになつてきたので、当分この線で」と書いておきながら今回はちよつと街のことについて書くことと思う。そうです。このコラムはたいへん気まぐれです。

さて、僕の場合はプライベートではもちろん、雑誌の編集カラムで街に出たり店に行ったりすることが多いのだが、このところちよつと気になることが多いことがある。それは、いわゆる最先端の店というやつが、あまりにも保守的になつていて、ということだ。

例えば、あるレストラン「P」の場合、お店の人が「うちがモデルやデザイナーたちが集まる店だ、ということとを必ず書いておいて下さい」という風に指示してくれた。もちろん僕は「ハイ」と言つてその通りに書いたが、今どきモデルやデザイナー、芸能人たちが来るからオシャレだ、とはならないことを遊ぶ側は知っている。また、別のレストラン「P」では、「うち

ではまず、音楽をめぐればいっばい楽しんで欲しい」とマネージャー氏が強くアピールした。その割にはレコードのストックが少なかつたし、サウンドも天井吊りのスピーカーと偏ったイコライジングのせいで、やたらと耳障りな音なのである。

この2つの店に共通するのは、

の部分に徹底的にこだわっていることだ。どちらもどこかの店で聞いたセリフだし、いわゆるコンテンポラリーと称する店の初期においては、たとえが、のような客だけでも充分にやつていける、という強気な部分があつたと思うし、の場合も、思わずウーンとうなる音を聞かせてくれたりしたものだ。それがいつしか、「そう言う風に店を規定すること」自体がポーズとして定着し、中身が伴わなくなつてきているみたいなのだ。

遊びの楽しみとは、言うまでもなく遊ぶ側が勝手に見つけて面白がるものである。当然、店の側が「ウチの店はこう楽しんでください」という提示とは別の部分でウケて店が流行することもあるわけで、だからこそ遊ぶことが面白いのだ。そうとはわかつていても、なおかつ遊ぶ側が面白がるための新しい要素や環境を本気になって提示することが、お店の側の誠意であるのだし、その誠意が今まで街を面白くしてきていたのだと信じた。

そう考えると、街はこれからどんどんつまらなくなると思えてならないし、ここにも確実に愛が失われているように、悲しい気分させられるのだ。